

フィジーにおける英語使用の民族差 — 中等学校生徒へのアンケート調査（分析）から —

The Ethnic Differences in Using English in Fiji — Results Analysis of a Questionnaire for Secondary School Students —

後藤田 遊 子*

要旨

イギリスによる統治時代から移民としてフィジーに定住してきたインド人（インド系フィジー人）と、先住民であるフィジー人の人口が拮抗するフィジーでは、英語が公用語であり教育言語でもある。現在、中等学校ではフィジー人生徒とインド人生徒の英語運用に差が生じ、学力的にフィジー人生徒が劣る結果が出ている。そこで、中等学校生徒の英語使用における民族差や男女差の実態を明らかにするために、3つの中等学校生徒に英語使用に関するアンケート調査を行った。回答結果からは英語使用の民族差や男女差を検証することができた。また、回答結果を分析することにより英語使用の理由（志向）には、共通語（リンガフランカ）としての有益性や目的達成につながる実用性が挙げられ、両民族と男子、女子に有意差が現れた。これらの結果が、フィジーの言語と社会・教育を理解する一助となることを期待したい。

キーワード：英語使用／フィジー人生徒／インド人生徒／民族差／男女差

はじめに

1643年にオランダの探検家タスマンがフィジー島を発見して以来、フィジーはヨーロッパ人の影響により大変貌を遂げた。イギリスの植民地となったのは1874年であるが、それ以前から、ヨーロッパの宣教師たちが、都市部や遠隔地の村々にミッション・スクールを設立し、キリスト教教育やフィジー語の識字教育を行っていた。英語がカリキュラムに登場したのは、1894年に設立されたカトリック系のミッション・スクールが最初であった。プロテスタント系の学校も直ちにこれに従っている。これらの学校はヨーロッパ人やフィジー人のエリート階級の子どものみを受け入れていた。しかし、植民地政府がフィジー人の教育に力を入れ始めてからは、英語を教育言語とするミッション・スクールの数は徐々に減少し、

フィジー語による教育が主流となっていった。

植民地政府の要請により、1879年から1916年までに約6万人のインド人がサトウキビ・プランテーションの契約労働者としてインドから移住してきた。かれらは契約期間が終了すると本国へ帰還することになっていたが、終了後も多くがフィジーに留まった。インド人経営のインド人学校が設立され始めたのは1910年代からであった。

英語が教育言語となるのは1926年からである。その理由は、ニュージーランドから招聘した教師たちが英語を使用して教育を行っていたこと、インド人との共通語として英語が適当であったこと、そして、インド人学校においても生徒たちが使用するインドの様々な地方言語を統一する必要があったこと、などが挙げられている（Mugler, 1996: 277）。1926年に制定された英語を教育言語とする言語政策は、小学校3年生までは母語で教育し4年生から英語に移行するというものである。以後、変わることなく現在に至っている。

* GOTODA, Yuko
北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科
多文化社会研究

1997年に制定された憲法では英語、フィジー語、ヒンディー語を主要言語とし、3つの言語に平等の地位が与えられた。しかし、実際には、教育言語はもとより、政治、メディア、公共のドキュメントなどにおいて英語が主流である。英語は都市部においては第2言語の役割をなしているといわれる。だが、よく観察してみると英語が民族間の共通語として必ずしも日常的に機能しているというわけではない。フィジー人やインド人が交錯するところでは、人口の4分の1が集まる首都スバ（Suva）でも、人々は非公式の場でももちろん公式の場においても、フィジー語やヒンディー語などをミックスした会話で交流している（Mugler, 1996: 275）。また、遠隔地や離島のようにフィジー人のみ居住する町や村では英語が日常会話として使用されることはない。

人口約83万人（フィジー人57%、インド人38%、その他5%：外務省、2007）の小国フィジーにも、経済のグローバル化による英語のグローバル化の波が押し寄せている。学校現場を見ると、都市部のインド人が多く通う多民族学校とフィジー人が過半数を超えるフィジー人学校では英語運用能力に差が生じている。多民族学校では英語使用が多く英語運用能力も高い。一方、フィジー人学校では母語使用が多く学力の低下が見られるため、教育熱心なフィジー人の親たちは子どもの将来を見越して教育水準の高い多民族中学校へ入れたがるという。

本稿では、筆者が2005年9月に実施した16～17歳のフィジー人とインド人の男子生徒や女子

生徒たちへのアンケート調査結果を元に、日常の英語使用や英語運用の民族差や男女差について分析してみたい。

1. 教育年数と国内統一試験

小学校は6年間と8年間の2種類の学校がある。学年を表すのに、小学校ではクラス（Class）、中等学校ではフォーム（Form）を用いる。表1からも分るように、クラス7、クラス8は中等学校のフォーム1、フォーム2と同じである。2007年度の中高等学校入学者数はフィジー人（男子：18,713、女子：20,761）の数がインド人（男子：12,489、女子：13,253）を上回っているが、両民族ともに女子の人数のほうが多い。

国内統一試験の結果は必然的に各学校のランク付となる。クラス8終了時の国内統一試験は、結果によって進学する中等学校の選別がなされることから、上位ランクの中等学校へ進学したい児童・生徒たちは、高得点取得のための勉強が強化されることになる。中等学校の生徒はフォーム4終了時の国内統一試験に合格するとフォーム5に進級する。この時点で学業が追いつかない生徒は学校を去る率が高い。しかもフィジー人生徒のドロップアウト率が高い。フォーム6終了時の国内統一試験の結果如何により高等教育機関へ進学するかどうかの判断がなされる。フォーム7は大学の基礎コースと考えてよい。フォーム7終了時の国内統一試験で高得点を得た生徒には、南太平洋諸国における唯一の総合大学、南太平洋大学に進学するチャンスが与えられる。テスト中心主義で

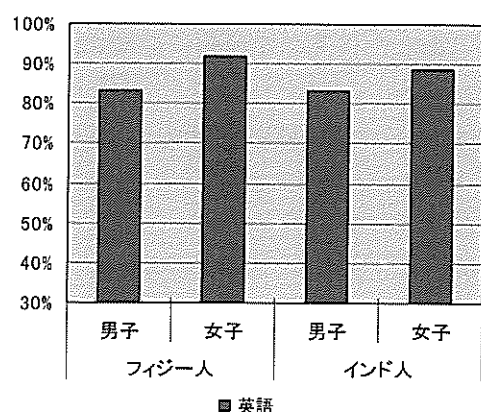
表1 教育年数

年齢	学年	クラス (Class)	フォーム (Form)	国内統一試験 National examinations
18	13		7	Fiji Seventh Form Examination.(FSFE)
17	12		6	Fiji School Leaving Certificate.(FSLC)
16	11		5	
15	10		4	Fiji Junior Certificate Examination.(FJCE)
14	9		3	
13	8	8	2	Fiji Eighth Year Examination.(FEYE)
12	7	7	1	
11	6	6		Fiji Intermediate Examination.(FIE)
10	5	5		
9	4	4		
8	3	3		
7	2	2		
6	1	1		

あるとして国内統一試験のあり方に疑問を抱く声もないわけではないが、進学する学校選択に有用であることで親たちに広く受け入れられている (Tavola, 1992: 59)。

表2は、クラス8の生徒が受ける国内統一試験 (FEYE) の英語の合格率のサンプル結果である。ここでは、フィジー人生徒がインド人生徒の合格率を上回っている。フィジー人男子とインド人男子の差に優劣はあまりない。小学校時代は遊び盛りの男子のほうが女子より勉強に時間を割かないともいえよう。ただし、フィジーでは、インド人児童の英語力が低い背景には、ヒンディー語によるラジオ放送やケーブルテレビの普及などによりヒンディー語を媒体とする娯楽時間が増えていることが指摘されている (Narsey, 2004)。一方、フィジー人児童はフィジー語による娯楽は少なく、英語を媒介とするテレビ番組、ラジオ放送、ビデオやDVD映画に親しむ。こうした背景が都市部に住む小学校児童たちの英語学習時間や英語に接する量に影響を与えているといえるだろう。

表2 1999年度 FEYE (Fiji Eighth Year Examination) の英語合格率サンプル結果

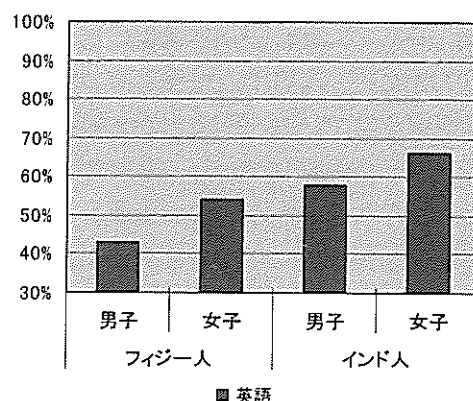


出所: Report of the Fiji Islands Education Commission/Panel 2000, p.253

表3では、フォーム6の生徒が受ける国内統一試験 (FSLC) の英語の合格率を示している。ここでは両民族に逆転が見られる。インド人生徒がフィジー人生徒の合格率を上回っている。特にフィジー男子の低さが目立つ。次に、参考として表4で2003年から2006年に至るFSLCのフィジー人生徒とインド人生徒の全科目の平均合格率を示しておく。いずれの年度もインド人がフィ

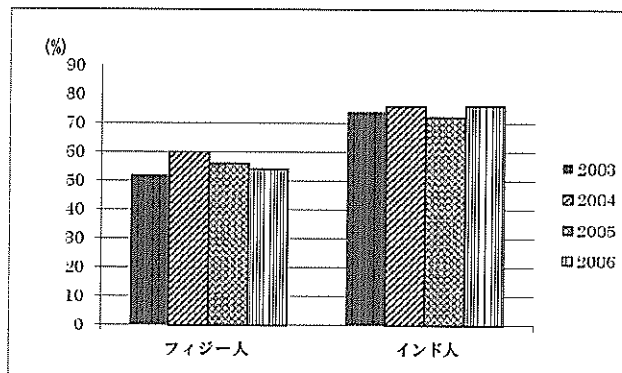
ジー人の合格率を上回っていることが分かるであろう。こうした国内統一試験による英語運用力や学力の民族差や男女差を踏まえて、事項からアンケート調査結果の分析を行う。

表3 1999年度 FSLC (Fiji School Leaving Certificate) の英語合格率サンプル結果



出所: Report of the Fiji Islands Education Commission/Panel 2000, p.253

表4 2003年～2006年におけるFSLC (Fiji School Leaving Certificate) 合格率



出所: Education For All: Mid-Decade Assessment Report Fiji, 2008

2. アンケート調査の対象とアンケート内容

調査対象をフィジー第3の都市で、国際空港がある観光都市ナンディ (Nadi) 周辺の3つの中等学校の生徒とした。ナンディには国際的なホテルもありフィジーで最大の観光都市である。ナンディ・タウンには諸外国からの観光客を見越したインド人経営のみやげ物店が軒をつらねている。フィジーでは経済はインド人が支配するといわれるほどインド人が商売を牛耳っている。国勢調査が行われた1996年、ナンディの人口はインド人がフィ

ジー人を上回っていた。以後、毎年人口が増加しているが、2006年の国勢調査ではナンディ周辺のフィジー人の増加により、フィジー人がインド人の数を若干上回る状況となっている。度重なるクーデターやフィジー人とインド人の様々な確執から、フィジーを離れ他の国に移住していくインド人が増えているのも理由のひとつであろう。

レスポナントはナンディ周辺にある3つの中等学校のフィジー人男子・女子、インド人男子・女子の生徒たちで、1、2年後には卒業し社会に出て働くことになる16歳から17歳の150人を対象とした。アンケートはレスポナントの居住地域、英語使用や運用に関する5つの質問項目を設定した。3つの中等学校は仮名で表示している。

- ① A S S : ナンディ郊外に位置し、学力レベルは高くインド人生徒が多い。
- ② B S S : ナンディ近郊の農村部に位置し、学力レベルはごく普通でインド人生徒が多い。
- ③ C S S : ナンディ市内に位置し、職業学校を併設しており圧倒的にフィジー人生徒が多い。学力レベルは3つの中等学校の中では一番低い。

調査対象とした3つの中等学校のレスポナントの人数構成は表5で示すとおりである。フィジー人(57人)よりインド人(93人)の人数が上回ったのはA S SとB S Sがインド人の多い学校であることが理由である。しかし、男子(74人)と女子(76人)がほぼ同数であることは男女間の比較に優位に働くと思われる。

表5 3つの中等学校のフィジー人男子・女子、インド人男子・女子生徒数の内訳

	A S S		B S S		C S S		Total	
	フィ ジ ー 人	イ ン ド 人	フィ ジ ー 人	イ ン ド 人	フィ ジ ー 人	イ ン ド 人	フィ ジ ー 人	イ ン ド 人
男子	6	20	5	28	12	3	23	51
女子	7	25	2	11	25	6	34	42
	13	45	7	39	37	9	57	93
合計	58		46		47		150	

アンケートによる5つの質問項目は以下のとおりである。

質問1. 学校にはどこから通っていますか?

Where are you living with while attending schools?

自宅から With your parents()

親戚から With relatives()

寮から Boarding at school()

質問2. 普段、どの言語を使っていますか?

What language do you usually speak?

自宅 At home(),

友達 With your friends(),

教室 In your classroom()

質問3. あなたは英語を流暢に話しますか?

Do you speak English fluently?

はい Yes(), いいえ No()

その他 Other()

質問4. あなたは、英語と母語ではどちらのほうが読み書きが得意ですか?

Which language can you write and read better, English or your native language?

英語 English(), 母語 Native language(),

両方 Both() その他 Other()

質問5. あなたは英語を流暢に話せたらいいと思いますか?

Do you think you should speak English fluently?

はい Yes()

はいの理由 Why? ()

いいえ No()

いいえの理由 Why not? ()

3. 居住地域について

質問1の「学校にはどこから通っていますか? (Where are you living with while attending schools?)」では、生徒たちが都市部か都市周辺あるいは遠方の出身者かを見た。87%(132人/150人)の生徒が両親と同居、13%(18人/150人)が親戚に寄宿と回答した。13%の内訳は、フィジー人生徒の23%(13人/57人)インド人生徒の5%(5人/93人)である。フィジーでは内陸部や遠隔地や離島の子どもたちが都市部の中等学校へ進学する場合、寮か親戚の家に寄宿することが多い。回答結果から3校の生徒の多くは都市とその周辺に住むことが

分かった。これは、レスポナントの62%がインド人であることも理由の一つであろう。インド人の多くは都市部やその周辺に居住しているからである。フィジー人生徒13人の寄宿生徒のうち10人がCSSの生徒であることは、この学校が成績を問わないため入学しやすく、職業教育に力を入れていることにも理由があると思われる。

4. 普段の使用言語

質問2の「普段どの言語を使っていますか(What language do you usually speak?)」では、「家庭」、「教室」、「友達」の間で使用する言語の使い分けに関する質問をした。ここでは学校別というより、フィジー人男子と女子、インド人男子と女子を比較しながら学校の内・外における英語使用状況を見てみたい。表6にフィジー人男子と女子に関する回答結果を、表7にインド人男子と女子に関する回答を表示した。

(1)「家庭」における使用言語

両民族、男子と女子のいずれにおいても母語の比率が高い。フィジー人男子は無回答の1人を除く全員が「フィジー語」と回答した。フィジー人女子は「英語」あるいは「英語とフィジー語」と回答する生徒4人を除く全員が「フィジー語」と回答した。インド人男子は、「英語」あるいは「英語とヒンディー語」と回答する生徒3人を除く全員が「ヒンディー語」と回答した。インド人女子は、「英語とヒンディー語」と回答した4人と無回答1人を除く全員が「ヒンディー語」と「その他のインド諸言語」と回答した。フィジー人女子で、「英語」あるいは「英語とフィジー語」と回答した生徒の家庭では、ニュージーランドとオーストラリアに留学経験のある高学歴の親、英語と母語で説教が可能と思われるキリスト教会の牧師である父親、英語が堪能な教師の母親がいた。子どもの家

表6 質問2のフィジー人生徒による回答

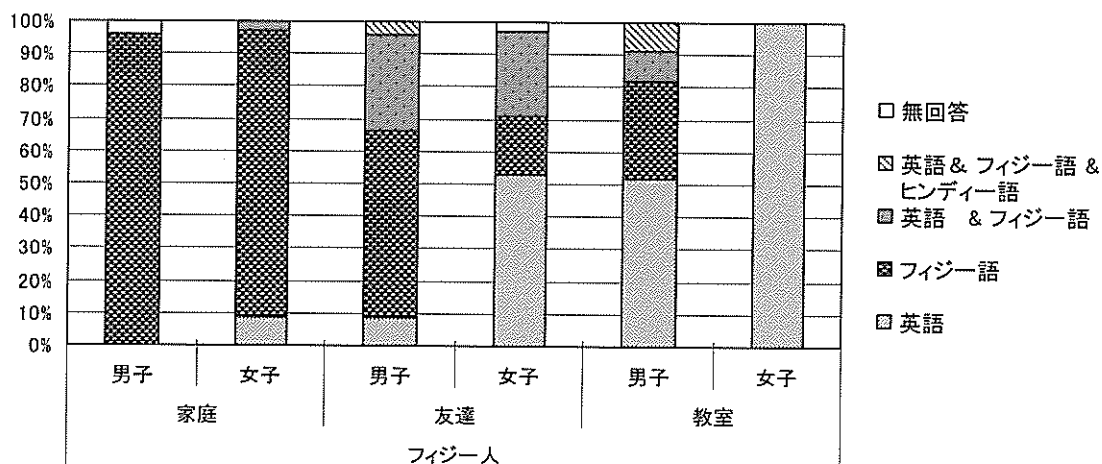
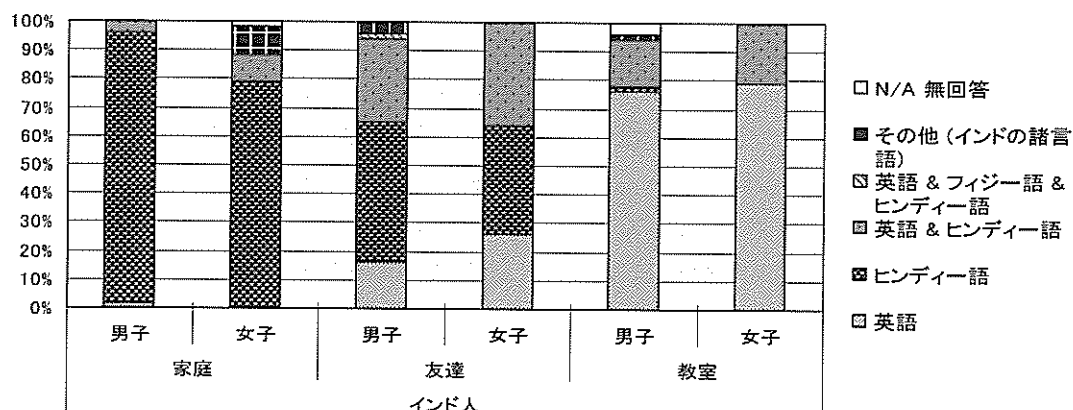


表7 質問2のインド人生徒による回答



庭での英語使用に親の職業や英語使用傾向との関連が推測できよう。しかし、全体から見て、英語使用が家庭にまで拡大していないことがこのアンケート結果からもはっきりと窺える。

(2) 「友達」との使用言語

ここでは、学校や家庭以外で英語が共通語として機能しているかどうかを探ってみた。家庭では母語と答えた生徒たちも外に出ると付き合い範囲は広がる。回答結果を見ると、両民族、そして男子と女子に明らかな差が現れた。フィジー人女子で、「英語」、および「英語・フィジー語」の両方を合計すると79%になった。インド人女子で、「英語」、および「英語・フィジー語」の両方を合計すると62%になった。インド人男子で、「英語」、および「英語・フィジー語」の両方を合計すると45%になった。フィジー人男子の英語使用率は全体で一番低く、「英語・フィジー語」の両方を加えても39%であった。フィジー人男子の学校外での英語使用の低さが露呈した。フィジー人女子とインド人女子には比較的言語の使い分けが見て取れるといえよう。小学生のころから、女子のほうが男子より、さらに職場においても女性のほうが男性より英語を使用していることが指摘されていることから、日常における女子の英語使用への傾向が窺える(Mangubhai & Mugler, 2006:88)。

(3) 教室における使用言語

「教室」内では教育言語として英語使用が義務づけられているため、英語使用が高い数字になるのが当然と思われたが、100%英語使用と回答したのはフィジー人女子のみであった。フィジー人男子の英語使用率は、「英語と母語」の両方を使用すると回答した4人を加えても70%である。インド人男子の英語使用率は、「英語とヒンディー語」を加えると92%になった。インド人女子は「英語とヒンディー語」を加えると100%になった。ここでも、女子の英語使用率の高さと言語の使い分け傾向が見られる。結果として、圧倒的にフィジー人男子に教室内での使用言語に乱れが見られた。フィジー人男子のレスポナント48% (11人/23人) がフィジー人学校C S Sに在籍してい

ることから、フィジー人学校におけるフィジー人生徒の英語使用の一般的な傾向を示していると思われる。しかし、フィジー人女子の74% (25人/34人) もC S Sに在籍しているが英語使用率は高い。C S Sにおいて英語使用におけるフィジー人生徒の男女差が明らかな結果となった。

以上、「家庭」、「友達」、「教室」での言語の使い分けから、生徒たちの英語使用状況を把握する試みであった。この結果から5点が明確となった。①家庭では圧倒的に母語が使用され英語が家庭にまでは拡大していない。②女子の友達間で言語の使い分け(バイリンガルの傾向)が見られる。③インド人男子と女子、フィジー人女子に学校内で英語使用率の高さが目立つ。④フィジー人男子の英語使用率は格段に低い状況にある。⑤フィジー人学校における女子の英語使用率は高い。

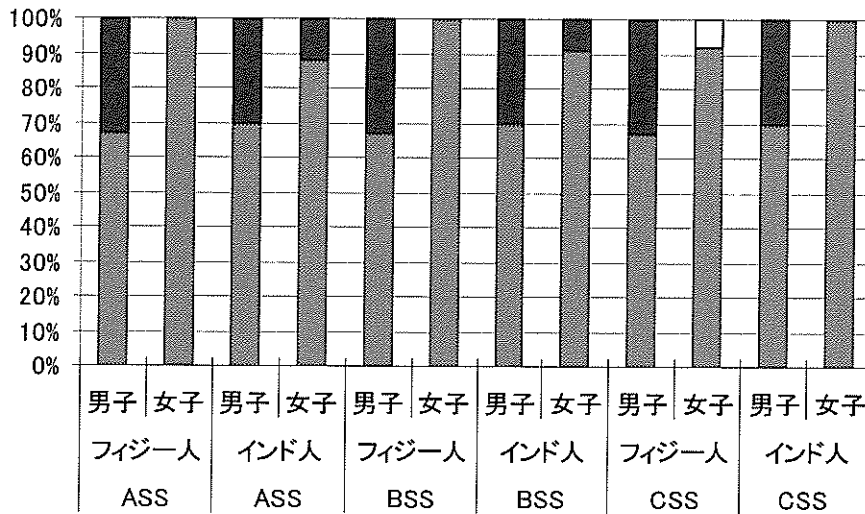
5. 英語運用について

質問3の「あなたは英語を流暢に話せますか(Do you speak English fluently?)」と質問4の「あなたは、英語と母語ではどちらのほうが読み書きは得意ですか?(Which language can you write and read better, English or your native language?)」は、英語運用について内省してもらうものである。質問3はスピーキングの流暢さに関する質問であるが、「流暢さ」を問うことにより、スピーキングに対する自信や傾向を見た。表8に学校別の、「イエス」、「ノー」の回答結果を表示した。

フィジー人女子の比率がほぼ100%、インド人女子は9% (4人) の生徒がノーと回答している。一方、フィジー人男子はイエスが67%でノーが33%、インド人男子はイエスが70%でノーが30%であった。これらの結果を質問4とともに分析してみたい。

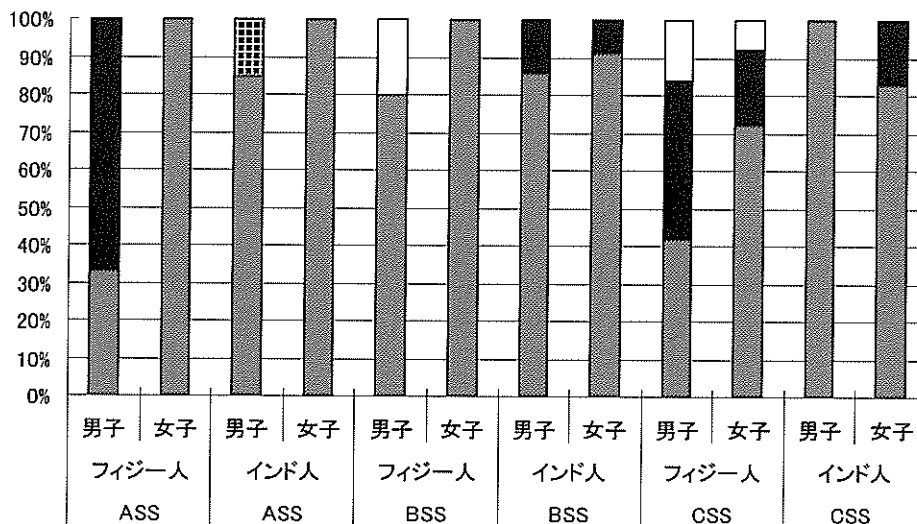
質問4は読み書きに関する質問である。読み書きの運用を尋ねることによって、先のスピーキングとともに包括的な英語運用への自信や傾向が見られると考えたからである。表9に学校別に「英語」、「母語」、「英語と母語の両方」と3つの選択肢を設けて回答結果を表示した。英語の読み書きが得意との回答が圧倒的に多いことが分かるであろう。しかし、フィジー人男子の英語の読み書きの低迷状況は明らかである。

表 8 質問3のフィジー人生徒とインド人生徒による回答



■ はい ■ いいえ □ 無回答

表 9 質問4のフィジー人生徒とインド人生徒による回答



■ 英語 ■ 母語 ■ 両方 □ 無回答

具体的に見てみよう。ASSとBSSのフィジー人女子は読み書きも「英語」のほうが100%得意と回答している。しかし、CSSのフィジー人女子は20%（5人/25人）が「母語」を得意としている。スピーキングと比較して、読み書きは若干苦手という結果であった。インド人女子を見てみよう。ASSでは「英語」のほうが100%得意と回答し、BSSとCSSに1人ずつ「母語」のほうが得意という回答があるものの、フィジー人女子より若干読み書きが得意という結果となった。インド人男子を見てみよう。ASSのインド人男子は85%（17人/20人）が「英語」で、15%（3人）が「英語と母語の両方」とも得意と回答し、

合計すると100%になった。BSSでは14%（4人/28人）が「母語」と回答しているものの、CSSでは100%が英語の読み書きを得意と回答している。国内統一試験におけるインド人生徒の平均的英語運用力の高さから判断して、インド人レスポンドントの英語が得意という回答からは学力レベルの高さも推測できるであろう。最後にフィジー人男子であるが、ASSのフィジー人男子は67%（4人/6人）が「母語」のほうが得意と回答、BSSでは無回答の1人を除いて全員が「英語」と回答、一方、CSSでは、10人のレスポンドントのうち「英語」が得意5人、「母語」が得意5人と回答が分かれた。

全体で見ると、フィジー人の25% (14人/57人)、そして、インド人の6% (6人/93人)が「母語」のほうで得意と回答したことになる。14人のフィジー人生徒のうち男子が64% (9人/14人)であることは見逃せない。

母語は小学校の高学年から科目の一部となり、中等学校では選択科目の一つとなる。カリキュラム上から見ても重点を置いているとはいえず、フィジー語教育の不十分さが指摘されている状況である (後藤田、2008:297)。英語の読み書きより母語の読み書きのほうが得意という回答には、

英語の読み書きへの自信のなさが現れているといえよう。母語を得意とする生徒が多いのは、男子のみならず女子も同様にフィジー人生徒の数が圧倒的なC S Sにおいてであった。結果として、フィジー人学校の生徒の英語運用がインド人の多い学校の生徒に劣るとの指摘がうなずける分析結果となった。但し、フィジー人男子においては、インド人の多い学校においても英語運用率が低かった。

英語運用について、質問3と質問4から次の3点が明確になった。①スピーキングは女子のほうが男子より得意である。②読み書きはインド人男子と女子が似たような比率で高く、次に若干低い程度でフィジー人女子が高い。③フィジー人男子が格段に読み書きの運用が苦手である。

6. 英語学習・使用の理由

質問5の「あなたは英語を流暢に話せたいと思いますか? (Do you think you should speak English fluently?)」では、英語を流暢に話せるほ

うがよいかどうかの質問である。イエスの回答は、インド人男子が98% (50人/51人)、女子が98% (41人/42人)、フィジー人女子が91% (31人/34人)、そしてフィジー人男子が87% (20人/23人)と他より若干低い比率となったものの、全般に高い回答率であった。

次に、質問5についてイエスやノーの回答に加えて理由を記述してもらった。英語が流暢であるべき理由を知ることによって、英語学習や英語使用に対する志向が考察できると考えたからである。記述による回答率は100%に近いものであるが、フィジー人男子のみが70%の回答率であった。大まかに4つに分類された (表10)。

- ① 英語が流暢であることは、英語力 (スキル) が身につくことであり、勉学の向上につながるという記述で、回答した生徒たち全員の平均が約28%であった。インド人男子の比率が高く、続いてフィジー人女子、インド人女子、そして最後にフィジー人男子と続いた。
- ② 英語は世界中で使用されている言語であることが記述されたもので、回答した生徒たち全員の平均が約16%と低い回答率であった。フィジー人女子が一番高く、次いで、インド人女子、フィジー人男子、インド人男子と続いた。
- ③ 英語は共通語として普及しており、コミュニケーションの手段として他民族との交流、相互理解に必要であるという記述であった。回答した全生徒の平均が50%強であった。

表10 イエスとノーの理由の内訳・回答率

①②③はイエスの主な理由 ④はノーの主な理由	フィジー人 男子	フィジー人 女子	インド人 男子	インド人 女子
①英語力 (スキル) の向上	18% (3人)	29% (10人)	37% (18人)	27% (11人)
②英語は世界言語	13% (2人)	21% (7人)	12% (6人)	17% (7人)
③英語はコミュニケーションの手段	56% (9人)	41% (14人)	47% (23人)	54% (22人)
④母語を優先	13% (2人)	9% (3人)	4% (2人)	2% (1人)
回答率	70% (16人/23人)	100% (34人/34人)	96% (49人/51人)	98% (41人/42人)

英語をコミュニケーションの手段ととらえていることを挙げた生徒たちの比率と、英語が世界言語であると記述した生徒たちの比率を加えると約65%が英語のコミュニケーション力を挙げていることになる。フィジーがイギリスを旧宗主国とした多民族・多言語社会であることを裏付ける回答である。実際に日常生活において多用されていなくても世界共通語に通じる有益性があるために英語の必要性を生徒たちは充分認識しているといえよう。インド人女子71%、フィジー人男子69%、フィジー人女子62%、インド人男子59%という結果であった。次に、全体の28%が英語のスキルを身につけることへの意欲を表明している。スキルを身につけ英語を流暢に話せるということは、英語学習・教育上のサクセスがキャリアに結びつくということである。インド人男子が中でも高い比率であった。

④にノーの理由の回答率を挙げたが、英語が母語ではないから、母語を失いたくないから、先に母語のほうを流暢になりたいから、また、常時英語を使っているわけではないからという回答であった。いずれの理由も示唆に富んでおり、母語使用に対するアイデンティティの表明が窺える。インド人女子の“常時、英語を使っているわけではないから英語が流暢に話せる必要はない”、という記述は現実に対する的を射た意見と思われる。

まとめ

アンケート調査結果分析から、中等学校の生徒たちの英語使用や英語運用に民族差や男女差が明確に現れた。インド人女子とフィジー人女子に英語使用と運用の高さが、インド人男子に英語運用の高さが、そして、フィジー人男子の英語使用・運用全般にわたる劣等が検証できたのである。

第2言語教育における動機づけ研究の先鞭をつけたガードナー (Gardner) は、言語学習を行う理由を志向 (orientation) という表現で2つに分類した。統合的志向 (integrative orientation) と道具的志向 (instrumental orientation) と呼ばれるものである。統合的志向は目標言語話者の所属するグループの一員になりたいという願望から言語を

学ぶというものである。道具的志向は、よい仕事を得て社会的成功を収めるという実用的価値に基づいて目標言語を習得しようというものである。ガードナーは言語学習において、統合的志向のほうが目的達成で終わりになる道具的志向より重要であると説いたが、目標が継続的なものならば道具的志向や動機づけの効果は持続するとしている (Gardner 1991:71)。シャミーム (Shameem) は、道具的動機づけはフィジーのインド人にはことさらに重要であり、英語の運用力が教育的にも経済的にも将来を約束する鍵になると述べている。また、インド人の英語学習の動機づけ要因はフィジーにおける政治的、社会的、民族的問題からの脱却であると付け加える (Shameem, 2004:157)。高等教育を受け英語圏の国へ移住するといった願望が英語学習への志向や動機づけとなっている可能性が高い。

一方、フィジー人生徒、特に男子生徒の学力が劣るのは、旧態依然とした村・共同体の相互扶助的慣習がいまだに根強く、教育の重要性を軽視する態度が改善されないことに問題があるからと言われている (Ministry of Education, 2007)。特にフィジー人が圧倒的な農村部や離島などでは、学校を取り巻くコミュニティの影響はより強く、学習への意欲を低下させることになる。両民族における英語使用や運用の差は、民族問題のみならずフィジー人の伝統や生活習慣などが背景にあることも忘れてはならないだろう。

女子に関しては若干の補足が必要と思われる。国内統一試験を見ても、アンケート調査の結果分析から見ても、両民族の女子の方が英語をよく使用している。しかし、フィジーでは、いまだに女子の社会進出は遅れている。キャリアを目標とする英語学習より、世界言語と自国における多民族間の共通語という関係的な英語使用志向が英語学習意欲を高めていると思われる。

今後、英語使用に積極的な女子が中等学校における英語使用をリードしていくと考えられよう。フィジー人男子やインド人男子の動向についてはさらなる検証が必要と思われる。

おわりに

近年、インド人の中でもエリートや専門的な技

術を有する人材の英語圏の国への移住の増加、出生率の低下などでフィジーの経済的發展に貢献してきたインド人の人口が減少している。フィジー人とインド人に介在する経済的格差や両民族間の確執によるとされる度重なるクーデターがフィジーを去る原因のひとつといえよう。クーデターによる観光産業の落ち込みや基幹産業の不振、失業率の高さなどは最近の貧困層の増加の原因ともなっている。それに伴う若者の犯罪の増加が顕著である。特にフィジー人の失業率の高さと犯罪率の高さが指摘されている（後藤田、2005:56）。

人口わずか83万人の小国に3つの主要言語（フィジー語、ヒンディー語、英語）があり、中でも英語が支配的であることが、この国の人々の生活の豊かさに直結しているとは考えられない。

本稿においてフィジー人男子の英語運用の劣等が検証されたが、母語以外の言語で教育を施すことが学習意欲の低下や学力の低下に繋がることへの警鐘であるといえないだろうか。フィジーの伝統的共同体（コミュニティ）意識が教育の重要性を軽視しているという指摘も、英語が教育言語であることの難しさや、必然性への疑問を提示しているといえよう。

松原（2002：34）は、「経済のみならず情報や文化などさまざまな領域でグローバル化が進展している現在、各言語共同体が持つ文化や地域性が「世界標準」に押しつぶされてしまわないような方向性を模索すべきである」と提言している。

現状において、英語が世界の共通語であり、民族間のリンガフランカという認識がフィジー国内における英語の地位を強化することはあっても、弱体化することはないように思われる。しかし、国民の多くが日常的に英語を話すわけではない現実を見過してはならないだろう。教育の現場では英語力の不足する生徒を前にしてコードスイッチングが頻繁に行われ、英語教育のみならず母語教育においても中途半端さが指摘されている。また、母語が衰退し危機言語化する懸念もある（後藤田、2008:297）。

フィジーの言語状況を通して日本が多言語社会化していく将来を見据えるならば、教育言語の重要性、多言語の共存のあり方、英語の果たす役割、そして、言語が経済格差の要因となる可能性などを視野に入れた準備が必要となるであろう。小国フィジーに学ぶべき点は大きい。

<参考文献>

- 1) 後藤田遊子 2005「南太平洋の楽園フィジー－多民族社会の表情－」、浅間正通編『人間理解の座標軸』学術出版会
- 2) 後藤田遊子 2008「フィジー－フィジー人とインド人を結ぶ英語」、河原俊昭編『小学生に英語を教えるとは？－アジアと日本の教育現場から』めこん
- 3) 松原好次 2002「アメリカの公用語は英語？－多言語社会アメリカの言語論争－」、河原俊昭編『世界の言語政策－多言語社会と日本』くろしお出版
- 4) *Education For All: Mid-Decade Assessment Report Fiji 2008*. (2008) Government of Fiji (Ministry of Education).
- 5) Gardner, R.C. and MacIntyre, P.D. (1991) An instrumental motivation in language study: Who says it isn't effective? *Studies in Second Language Acquisition* 13.
- 6) Munghbhai, F. and Mugler, F. (2006) "The Language Situation in Fiji" In Richard B. Baldauf Jr and Robert B. Kaplan (eds). *Language Planning & Policy*. PACIFIC, VOL, 1.
- 7) *Ministry of Education Annual Report 2003*. Parliament of Fiji. (2003)
Parliamental Report No.40 of 2004.
- 8) Mugler, France. (1996) Vernacular Language Teaching in Fiji. In Mugler and John Lynch (eds.), *Pacific Languages In Education*. Suva, Fiji. The Institute of Pacific Studies, The University of the South Pacific.
- 9) Narsey W. (2004) *Academic Outcomes and Resources for Basic Education in Fiji*. Institute of Education. Suva, Fiji. University of the South Pacific.
- 10) *Report of the Fiji Islands Educational Commission/Panel. Learning Together: Direction.*
for Education in the Fiji Island. (2000) Government of Fiji (Ministry of Education).
- 11) Shameem, Nikhat. (2004) Language Attitudes in Multilingual Primary School in Fiji. *Language, Culture And Curriculum*. Vol. 17, No.2,
- 12) Tavola, Helen. (1992) *Secondary Education in Fiji*. Suva, Fiji. The University of the South Pacific